

---

# 季風《かぜ》に散るらむ

虚空蒼月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

季風<sup>かせ</sup>に散るらむ

### 【Nコード】

N0667E

### 【作者名】

虚空蒼月

### 【あらすじ】

取り残され続ける者、見送り続ける者。求め続ける者、奪われ続ける者。俺はどちらも知って居る。俺だけは、必ず、側に居る。

## 序・血塗れの娘（前書き）

おはようございます。こんにちは。こんばんは。

虚空蒼

月と申します。初投稿なのに初連載です。生活時間の都合上、いつの間にか更新します。はじめはじゃんじゃんけなしてください。そのあと生易しくして下さい。時代小説のつもりは無いので時代考証ぶっちぎりです。イメージ全開です。戦闘があればやはり血は流れますが極力残虐にならないようにしたいと思います。

まずはお試しあれ。

## 序・血塗れの娘

……そのむすめの死顔は、驚く程に安らかであった。

亡骸のすぐ側には、只、茫然と立尽くす若い男。むすめよりも幾分幼さの残るその若者は、こめかみが引き吊る程に奥歯を噛み締め、そして、己を責めて居る態。

娘の亡骸に外傷は無い。が、喀血したものとみえるおびただしい血意地ずに生き抜いた娘は、病であった。

《…間に合わなかった…！》

宿場町をつい出たばかりの街道である。空は何処までも碧く高く、しかし、暖かな日の昼過ぎに、枝垂桜のその下で娘は息を引き取った。

戻ることも出来た筈だ。

しばらく自分を待つて合流する事も出来た筈だ。

なのに何故。

「こんな処でッ！」

見れば、辺りの死骸はいずれも頸筋を一太刀に始末している。その数、十七、八体。なにかを護り、そして娘…ぬえと云っていた…は、病に倒れた。

「ねエ、おサムライさん。…もし……もしもわたしがおっ死<sup>ち</sup>んだらサア…、」

と、向い合せに腰掛けた処で、にやにやしなからぬえは切り出した。

「わたしの荷を開けて、見苦しいもんは捨てておくんなさいな。おんなが行き倒れたあとに恥イ搔くのアぞつとしないやね」

「なにを云やがる、縁起でもねえ。そんなに死んだ後が拙けれア、生きてるウチに捨てつちまいな」

と、これもまたにやにやしなから若い浪人…まだ幼さの残る顔立ちである…鯨島七右衛門は応えた。

「…嫌ですよ七右衛門様。生きてるあいだはせいぜい遣いますのサ。」

ふた月程前に同道する様になつてから、幾度か繰り返したやり取りである。しかしその実、七右衛門はぬえの云うところの見苦しいモノが何かは知らない。

中途半端な侍の、しかも二人目の妾腹の、更に七番目の末っ子に生まれ、憐れな母と貧しさに因る、義理と呼ぶのも不愉快な親族からの理不尽な虐待の末、喧嘩と道場破りに明け暮れて、さむらいなのか野良犬なのか判らぬ暮しをするうちに、ぐれているのも莫加馬鹿しく、せめて納得、合点、得心して野垂れ死にでもなんでもしてやれ、とばかりに出奔したのが十八の秋。二年前の事である。

武士の気位等は生まれつき持ち得ない育ちのお陰で、ふらふらしながら百姓、獵師、漁師らの手伝いをしては旅を続けている。

一方、ぬえは、奉公先の武家が断絶したとかで暇を出され、故郷へ帰ろうと思つて居たら、彼女は奉公人であるのに、その家に貸し付けた借金とやらの取り立ての為にわざわざ呼び出された高利貸しの屋敷で、主の妾にされかけたところを自らの手で張り倒し、それ

だけならまだしも、床の間の飾りからなにからをひととおりぶち壊してそのまま水路の舟で逃げだしてきた程の美貌が災いしてか、故郷へ戻る道すがら似た様な騒動を起こしながらやはり半年近くになると云う。

色々と偽りであろつ。

ただ、そういう事においてくれ、という心情だけは無理のある  
明るさから汲み取る事が出来た。

出会ったときはその冗談の様な身の上嘸などよりも、十八の齡より不必要に老成してしまつた血まみれの、しかしそれでも年頃の、  
うつくしいむすめが、そこには居たのだから。

《続く》

序・血塗れの娘（後書き）

んです。

かわいそうなだけっての嫌な

## 序 二

鮫島七右衛門がぬえと名乗る娘に出くわしたのは、 年が明け  
て小正月も過ぎたある日の事。

行き先を思い付かず、街道を逸れて林のなかをぶらぶらしていた。  
藪を抜けると、どうやらどこぞの寺内の敷地らしく、大きく拓  
けた庭に出た。

警固の者にも見咎められては面倒…と思ったが、見渡してみ  
ると、まるきり線香の香りもしなければ人氣も無い。ごく最近無住  
になったものとみえ、煤けているが荒れてはいない。

どうやら本堂の裏手らしきところからぐるりと建物伝いに表に回る。  
無住になる程であるから格式は高くあるまい。

とりあえず水でも遣って人心地着こうと井戸の脇まで足を運ぶ。

（今日はここいらで手を打つとするかの…）

顔を洗って首筋を拭くと、要は面倒臭くなってきた。屋根が有  
る事自体が僥倖である。 よし、ここにしよう。

とすればやはり本堂に上がり込んで仏の前で過ごすのがせめて  
もの気休めになろうか。 ひとつ拝んで戸を開ける。

閉める。

驚いた。



こんどはうつすらと開けてみる。

やはり居る。

気配はまるで感じなかった。

しかしながら。

確かに、複数、居る。

坊主頭であつたなら、なにもこれ程驚きはしない。

いや、せめて頭があつたなら。

死んで居るのだから気配がないのは当然だが。死臭も無いとは  
どういうことか。死んで居るのだから気配がないのは当然だ  
が。死臭も無いとはどういうことか。

辻褄が合わぬ。

無住の寺の本堂に、首無し<sup>の</sup>体が八つ。

妖か。

まさか。

人形？

意味が判らぬ。

下手人は？

とうに居るまい。

ならばせめて弔うのが一宿の義理であろつ。

南無阿弥陀仏。

観音様だった。

## 序 参 在りたい在り方

事の次第は兎も角も、八体の首無し/bodyが何なのか、とりあえず念仏混じりに手を合わせ、本堂の中を見渡してみる。

袈裟も衣も着ては居ない。何か願掛けの講中か。

といって掛け金を争った様子も無く、中央奥に有る観音像を囲む様にがらんとした堂内に倒れているばかり。

男ばかり八人、裾をはだけて息絶えて居た。

(こいつアどうやら...)

「御察しのとおりでございますよ、お侍様」

不意に声がした。

驚いて振り向くと、七右衛門よりやや年上であろうか、引詰め髪のおんなが立っていた。

「こりアおどろかしちまってあいすいませんねエ。でもねぐらをお探しなんでしょう、こんな外道の転がってるところだけアおやめなさいまし。」

名乗りもせず女は云った。

「そいつアどういふこったい？」

七右衛門も気にせず問う。

「寄つてたかつてむすめをどうにかしまおうとした病犬やまいぬどもサ。観音様の罰ですヨ」

「するてエとおまえさん、こいつらに…?」

「まさか。無理矢理貸し付けた借金とやらのカタにかつさらった娘を叩き売る前に鬻りもんによつてエ　とこへ通り掛りましたのサ」

「じゃあ殺つたのアおめえか?」

「…性分できてねエ…寄つてたかつてのがどうにも。ほつとけないものア放つとけないんです」

「…そうか。そういう事なら仕方がねえ…てなわけにもいかなえんだろつが、ハナシは解る。いいウデだな。」

「…そリアどうも。…で、どうなさいます…?　わたしをお縄にでもなさいますか?」

すうつと目が細くなる。

「どうもしねえよ。殺つてるとこも見てやしねえし、こんなおかしなホトケも見た事がねえ。突き出し様がねえだろつ」

それに、と七右衛門は続けた。

「おれならこんなもんじゃすまさねえ」

「…ありがとうございます。なにしろお宿をお探しなら、もち

つと先に宿場がございます。あつかましい様ですがそこで、もう少し  
嘶を聞いちゃいただけませんか」

「まアかまやしねえが、…おオそうだ、おれは鮫島七右衛門と  
云う」

礼儀知らずと侮られるのも嫌なので先に名乗ると、女はあらい  
やだ、と笑って。

「いきおいでわたしばかり喋っちまってあいすいませんね」

口数を恥じる様に名乗った。

「わたしア、ぬえ、ってんです」

それが別れの始まりだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0667e/>

---

季風《かぜ》に散るらむ

2010年11月24日15時58分発行